

なぜ「ニート」という言葉が流行するのか  
— 二極化した「ガンバリズム信仰」と「信仰」告白としての「ニート」 —

学籍番号 1200 2067

床並 高明

指導教員 立木茂雄教授

## 目次

- 1 要旨 — 1
  
- 2 「NEET」と「ニート」 — 2
  - 2.1 「ニート」という言葉の「流行」
  - 2.2 「ニート」言説への違和感
  - 2.3 「ニート」を見つめる新しい視点を求めて
  
- 3 「ニート」を紐解いてゆく — 5
  - 3.1 日本の「空気」を感じ取る
  - 3.2 日本における「資本主義の精神」
  - 3.3 日本における「格差」の発生以前を振り返る
  - 3.4 日本の「一億総中流」意識の分析
  - 3.5 日本に潜在する「信仰」
  
- 4 日本人の為の「信仰」 — 14
  - 4.1 「一億総中流」の機能
  - 4.2 「一億総中流」という「善」
  - 4.3 「一億総中流」の養成装置
  - 4.4 「一億総中流」が信じる「福音」

- 5 「ガンバリズム」主義者の倫理 — 22
  - 5.1 「ガンバリズム」主義者
  - 5.2 「ガンバリズム」主義者の信仰危機
  - 5.3 「ガンバリズム」主義者の絶望
  
- 6 「福音」を再び求める人々 — 26
  - 6.1 「福音」としての「ネオリベラリズム」
  - 6.2 「福音」の原理主義化
  - 6.3 「福音」として日本に起きた「ビッグバン」
  - 6.4 「福音」は二極化した
  - 6.5 「福音」を求めて孤独に走り続ける

巻末 参照文献・引用文献リスト

## 1.要旨

今日の問題を読み解く鍵のはずの「ニート」という言葉が、その機能を離れて複雑な「流行」を見せている。背景にある日本社会の心理への分析を試みた。

雨宮処凛による労働問題における心理的な面での構造的な齟齬への指摘を出発点として、日本の労働に関する社会背景を主にマックス・ヴァーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と山田昌弘「希望格差社会」における視点に立って分析した。

世論調査において「去年と比べた生活の向上感」と「生活の程度」という質問への近年の回答傾向の差異に注目し、「格差」への失望と実感がありながら「中の中」という「一億総中流」傾向を保持続ける日本人の自己認識に注目した。

心理の乖離を担保する理由として、近代資本主義に必要な「資本主義の精神」を、日本人は教育制度における「パイプライン・システム」という「予定説の代替品」によって養った結果、「福音」を求める宗教的態度を潜在的に身に付けたからだと解釈した。

以上の視点から「ニート」問題を再解釈した。「フリーター」問題と「ニート」言説が強い相関と同時に乖離を併せ持つのは、両者が「パイプライン・システムの漏れ」から発生した問題でありながら、前者が世俗的価値基準によるのに対し、後者が潜在的に「善」や「信仰」という問題を含むからだと分析した。

また、「ネオリベリズム」を志向する「中の上」傾向の台頭は「一億総中流ガンバリズム」から「原理的ガンバリズム」が分派した結果と分析した。

そして「ニート」という言説は、日本社会においても潜在的に宗教的倫理が存在する事を表明する「信仰」告白として機能していると結論した。

キーワード：ニート、予定説の代替品、二極化

## 2.序論 「NEET」と「ニート」

### 2.1 問題提起 「ニート」という言葉の「流行」

「ニート」という言葉が日本に広く認知されたと思える節目は 2004 年と見ることができ、同年の「ユーキャン流行語大賞」において「ニート」という言葉は大賞候補としてノミネートされている。ノミネート時点ではこの言葉は「ニート (NEET)」と表記されるように、当該の大賞では「NEET」という用語との明確な区別を意識して紹介されていない。

「ニート」および「NEET」という言葉について、厚生労働省委託の「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書」において以下を引用する。

近年、「ニート」という用語は広く知られるようになり、取り組みも始まったが、その実像にはあいまいな点が多い。そのことが行政施策の重点を定めるうえで重大な障害となっている。本調査は、ニートの状態にある若者のなかの「あるタイプ」の実態を把握したものであり、そこからわかったこととわからなかったことを明確にする必要があるだろう。

ニートという用語は、イギリスの若年者対策において使われるようになった「NEET」という用語を日本語の「ニート」に置き換えたものであった。イギリスでは、1999年に労働党ブレア政権が、社会的排除対策室 (Social Exclusion Unit) をたちあげ、学校にも雇用にも職業訓練にも従事せず社会から隔絶された若者への取り組みを開始した。その後の多くの調査研究では、社会的排除の状況はこれまで考えられていたより複雑であり、社会経済的・文化的変化の複雑さを十分に考慮しなければ、政策の効果は引き出せないと指摘されている。イギリスに限らず多くの先進国がこのような若者を抱えている。

(財団法人 社会経済生産性本部,2007,『ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書』:62)

(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>,2009.1.10) .

## 2.2 「ニート」言説への違和感

「ニート」という言葉が日本においても浸透した背景も、欧米と同じく若者を主とする不安定な状態の人々が増加し各方面で問題となっているからである。

マス・メディアやインターネット上の個人のやりとり等の場面において「ニート」という言葉が使用される時、より複雑なイメージを帯びる。ひきこもり問題と「ニート」問題が併せて話題となる傾向があり、そこでは心理的な問題を抱える若者が無業者となり問題となっているという調子で、「息子が大学を卒業して10年以上家にひきこもっている」というストーリーが語られる。このようなマス・メディア報道に対して、インターネット上の掲示板などではネガティブな反応が散見され、問題となる人々は「ヒッキー（ひきこもり状態の人々を指すスラング）」「ニート」などと呼ばれたりする。この文脈においては「ニート」という言葉は原義的な意味において中立的に使用されるのではなく、対象への侮蔑などを多分に含んでいる。世間に流通する「ニート」という言葉とは、就労を拒む者、一般的な形態での労働・生産活動を行わない者への、大抵は侮蔑や揶揄である。「パラサイト・シングル」の状態の者へも使用される場合もある。ただしこの場合、原義の厳密な定義においては誤用であろう。

大枠の意味で不安定層を認識するための言葉としては「プレカリアート」という造語もある。この言葉の発生については以下の引用を示す。

プレカリアート。「Precario（不安定な）」と「Proletariato（プロレタリアート）」を合わせた造語らしい。○三年、この言葉はイタリアの路上に「落書き」として現れたという。以来、世界中の不安定なプロレタリアートたちに広まり、ユーロメーデーなどで広く使われるようになる。

定義は一言でいえば、「不安定さを強いられた人々」だろうか。

（雨宮処凛，2007，『生きさせろ！』太田出版。）

「プレカリアート」という言葉はボトムアップ的に自然発生しているが、「NEET」および「ニート」という言葉は本来政策的な必要から生まれたトップダウン的なものであり、両者は対称的であると言える。

「プレカリアート」という言葉は労働争議などにおいて不安定層の当事者が互いを連帯するために呼び合う文脈で使用される言葉であろう。一方、通俗的な文脈における「ニート」という言葉は、倫理的に欠落のある怠惰で無気力な社会不適応者として相手を非難するために使われてしまう。

旧来のフリーライダー問題と通俗的な「ニート」への非難を比較した場合の差異も注目すべきである。フリーライダーは各々の社会的所属集団が存在し、その集団の目標とする利益をフリーライダーは不当に獲得し非難される。所属集団外の、利益と直接関係内人々から見るとフリーライダーは倫理的に問題があってもある種の「したたかな」存在とみなす事も出来る。しかし「ニート」として非難する場合、社会的な所属集団も目的とする利益も重ならない人々に対して非難しているのである。

現在の日本人は不安定層を認識する時、互いを同じ立場として連帯感を持つ事に消極的な一方で自身と直接関係ない人々に対して「ニート」という言葉を投げ掛けずにはいられない。そこには歪んだ心理がなかろうか。歪んで流行し使用される言葉は、日本社会の歪んだ自己認識の表れではないかと考えられる。

### 2.3 「ニート」を見つめる新しい視点を求めて

日本における「ニート」という複雑に入り組んでしまった現象、それを解きほぐし現在の日本で何が問題であるのかをより理解する事を試みる。その事によって当事者としての不安定な若者である私が私自身に、そして社会が向き合う不安定に少しでも向き合う事が出来るようになる事を試みるのである。

### 3. 「ニート」を紐解いてゆく

#### 3.1 日本の「空気」を感じ取る

日本における「ニート」に関わる現象を紐解くためには、その熱狂的な言説から一步離れた視座に立つ必要がある。現在の日本における心理状況を理解するための考察材料を提示を試みる。

「ニート」という言葉は本来、政策的な必要から現象を認識し対象となる不安定層を定義するための概念である。内閣府と厚生労働省で調査上の定義範囲について相違があり、有識者の論議における定義も各人の論点などによって違いがある。問題解決の為の道具として、社会現象を認識するための手段として「ニート」という言葉は客観的かつ厳密な定義の下で使用されている。

一方、通俗的な場面では「ニート」という言葉がしばし本来の意味を逸脱して使われている。

そもそも「ニート」NEET (Not in Employment, Education or Training) という言葉は差別語あるいは侮蔑語でしょう。英国生まれの造語で、「勤めない、学ばない、訓練しない」ということで、自立心がなく、ブラブラを決め込んでいる最ダメ人間を名指ししているじゃないですか。

(「あの哲学者にでも聞いてみるか」13 鷲田小彌太 祥伝社)

このように「ニート」という言葉は通俗的な文脈で使用されるにあたり中立的に客観的な状態を表すのでなく、漠然とだが多分に否定的な意味で使用される。

また、しばし定義を離れた対象へも使用される。

私も何人かのニート（自称）にインタビューをしてきましたが、実際話を聞いてみると、彼らの多くは社会と何かしら関わりを持っているようです。

たとえば、友人の会社でコンピュータ・ソフト開発の手伝いをしているとか、ボランティアで介護の手伝いをし、おこづかい程度の賃金をもらっているとか。それじゃニートではないだろう、と思うのですが、それでも彼らは自分たちのことをニート



と呼びます。

(「格差社会スパイラル」 116 大和書房 山田昌弘 伊藤守)

本来の「ニート」の定義から離れた状況にある者であっても、意識的に自身を「ニート」と自称するのである。また、いわゆる「パラサイト・シングル」である者が対象として使われる事もある。通俗的な意味で「ニート」という言葉が使用される場合、必ずしもある特定の具体的な状態の個人や社会層を特殊な存在として指摘するとは限らない。

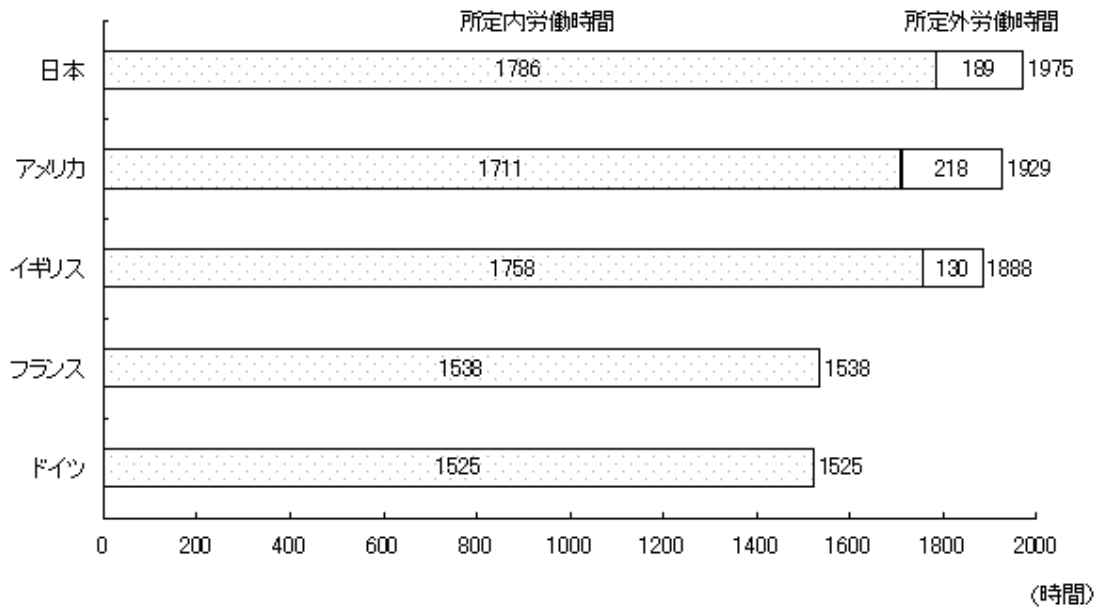
そして、以上の二つの用法が合わさって使用される場合もある。そうになると「ニート」という言葉は本来の定義を超えてますます曖昧な概念として使用される。個人であろうとある状態や行為であろうと、具体的な価値判断による相対的な比較や評価を越えて対象を表現する。極端な使用では、個人であれ状態や行為であれ、理解する必要もなく「そうある事」自体が罪であるので「ニート」という背信には「ニート」という烙印を与えられるのである。

「ニート」という言葉が流行する日本社会の背景にある価値観とは何なのか。このような、「ニート」は「悪い」のだ、という公理じみた言説を保証するのは何であるのか、そして何時の間にそのような暗黙の了解が形成されてしまったのか。それを紐解いてゆく。

### 3.2 日本における「資本主義の精神」

「ニート」という言葉の流行について考える時、そもそも「働くこと」とはどうことかを再確認する必要がある。

近年まで世界的に日本人は「勤労」の見本であった。



年間総労働時間の国際比較（製造業生産労働者、2003年）

(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/05/s0520-7c.htm> 2009 1.20)

近代日本は世界第2位の経済大国とまで発展したのだが、そのような国際競争力を裏づけしたのは「エコノミック・アニマル」と揶揄されるほどの日本人の勤労振りである。

一方で先進国としては異例の自殺率の高さが計測されるのも日本である。近年は傾向が変わっているが、労働にかかわる自殺は世界でも飛びぬけており、「カロウシ」という言葉がそのまま輸出されるほどである。「健康のためなら死んでもいい」という皮肉があるが、まさしく日本人は第三者からすれば「働くために働いている」のではないかと疑うほど勤労である

外国人から見ると、まだごく自然に「日本人は勤勉だ」と移っているようである。日本を訪れたり、日本で働いている外国人からは、日本人の勤勉さにあらためて感心

するといった感想がしばしば聞かれる。「働きバチ」「働きアリ」というレッテルは欧米人によって貼られたものだ。よく働くが、ただ働くだけで楽しまない、個人を犠牲にして集団のために働くといった非難が含まれている。働いている時間は長いが、仕事をする密度は必ずしも濃くないという見方もある。

(『「良い仕事」の思想』 3 杉村芳美 中公新書 1997)

このようなかつての勤労振りの理由を敗戦とその後の貧困を発展の理由とする見方もできるが、目の前の飢餓や生活基盤の整備後も日本が走り続けた事、つまり「追い越し追いつけ」という高度成長期におけるような勤労を説明するには物質的困窮は不十分である。本稿では日本人をさらなる勤労に駆り立てる事を可能にした価値観に注目したいが、その前段階として労働についての歴史を述べる。

人類の生産方法は進歩した。原始的な狩猟生活から農耕牧畜による生産量の拡大と安定、工業化による大量生産、蒸気機関による産業革命、そして近年の IT による情報産業社会の到来。その発展は主となる労働の場面が人間の制御下におかれたものに移行していく歴史である。

狩猟の場合、獲物となる動植物が手に入られるかは自然の状況に大きく左右される。獲物を取る技巧を磨く事は出来るが、獲得の場である自然とは巨大で「どうすることもできない」存在である。また、農耕が普及してからも、人間の仕事は天候などの自然条件に沿ったものが専らであった。農耕技術やそれを効率よく行うための制度が発展し普及しても、その労働量の限界は自ずと自然環境によって規定されていた。自然という不安定で不可侵の存在の運行へどうにか干渉したいという願望は各地の原始的な神話の中に見て取れる。また主な労働手段は人間自身であった。道具や動物などの利用により効率を上げる事は可能であったが、一人当たりが生産できる限界もまた生物としての自然な限界があった。人々は自然という限界に沿って生活したのである。

このような古典的な労働と生活の関わりが一変する。時計の登場と普及、「時は金なり」という言葉によって象徴される、産業革命における変化である。労働方法が農耕などの肉体的なものから機械の操作などに移行する事で、自然の限界を越えた労働が可能になった。そこで注目すべきは労働時間とその生産成果に旧来よりも非常に強い因果関係を見る事が可能になった点である。そのような労働時間の制御によってその生産の成果を増大させる

事が出来るようになったのである。

自然に依存した生産活動では、成果は人間の努力だけでなく自然の気まぐれの産物でもあった事は明白であった。しかし近代の工業における生産活動の成果とは生産者がどれだけ生産活動に忠実かつ長時間労働したかに因るようになった。

では、可能性が開かれたであるから人間は富を求めてより誠実に長く働こうとするのだろうか。マックス・ヴェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において以下のように述べている。

人は「生まれながらに」できるだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなく、むしろ簡素に生活する、つまり、習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手にいれることだけを願うにすぎない。近代資本主義が、人間労働の集約度を高める事によってその「生産性」を引き上げるといふ仕事を始めたとき、至る所でこのうえもなく頑強に妨害しつづけたのは、資本主義以前の経済労働のこうした基調だった。現在でも、資本主義の土台となっている労働者層が「立ち遅れ」（資本主義の立場からみて）ていればいるだけ、この障害がどこでもよけいに強い。

（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 65 ウェーバー 大塚久雄訳 岩波文庫）

つまり、人間とは必ずしも「より豊かな生活」を選択しようとするわけではないのである。生産量の向上を図る時、人間の「営利心」（同 65）に訴えるだけではそれは達成されなかったのである。

また、労働の質を向上させる場合にも問題があった。

およそ高度に鋭敏な注意力や創意を必要とするような製品の製造が問題となる場合には、低賃銀はつねに資本主義の発展と支柱としてまったく役立たない。こうした場合には、低賃銀は利潤をもたらさず、意図したところとは正反対の結果を生む事になる。なぜなら、こうした場合には端的に高度の責任感が必要であるばかりか、（中略）あたかも労働が絶対的な自己目的——Berufu（「天職」）——であるかのように励むという心情が一般的に必要となるからだ。

（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 66 ウェーバー 大塚久雄訳

岩波文庫)

このように近代資本主義が実現されるには労働への態度が問題となったのである。

日本において近代資本主義が理想とする生産を体現した集団はトヨタ自動車であろうであらう。

「日々改善」、「よい品(しな) よい考(かんがえ)」の思想を実践することで、トヨタ生産方式は世界に名の知られる生産方式へと進化しました。そして、現在も全生産部門において、その進化に向けて日夜改善努力が続けられているのです。

今日では、「トヨタのモノづくりの精神」は TOYOTA WAY と称され、日本国内や自動車産業にとどまることなく世界中の生産活動に適用され、グローバルな進化を続けています。

トヨタ自動車：企業情報 > ビジョン／フィロソフィー

([http://www.toyota.co.jp/jp/vision/production\\_system/origin.html](http://www.toyota.co.jp/jp/vision/production_system/origin.html) 2009 1.26)

事実として、トヨタ製の自動車はその価格と品質への信頼によって世界的に普及している。トヨタの「日々改善」、「よい品(しな) よい考(かんがえ)」にあるような思想を体現する企業が先進工業国日本を形成した。日本人の生産活動は近代資本主義活動を非常に強く体現していると言える。

「プロテスタンティズムとその倫理」においてヴァーバーは近代資本主義における要素として「天職」思想と、利己心からは非合理的に思える「職業労働への献身」(94)に注目し、プロテスタンティズムの世俗内禁欲の態度が結果として近代資本主義に必要な資本の集積を可能にしたと論じている。ならば日本人が体現した近代資本主義活動は「宗教的」行動だったと言う事が出来るのではなかろうか。プロテスタンティズムにおける大きな価値観はカルヴァニズムにおける予定説であるが、では日本において日本人の「宗教的」行動を支えた倫理は何であったのだろうか。「予定説の一種の代用品」(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」261) となって日本人を勤労に導いた「福音」の正体とは何だったのか。

### 3.3 日本における「格差」の発生以前を振り返る

日本人の労働倫を支える「福音」を理解するために、山田昌弘の「希望格差社会」における「格差」の分析に着目する。

近年は「格差」が広がった暗い時代なのだという世論がある。

近年、経済の高度成長期を懐かしむ言説が目立ってきている。『文藝春秋』二〇〇三年九月号では、この時期（高度成長期の後半期）を「黄金時代」と名づけ、様々な人々が「希望にあふれた時代」として回想記を寄せている。

（「希望格差社会」72）

山田は「希望にあふれた時代」という認識を担保していた要素について、家族生活の形成に「確実性」と「成長」の両立（「」72）があった事を指摘している。

結婚し、夫は仕事で妻は家事で子供を生き育てる生活に、経済的、および家族的「リスク」がほとんどなかった

（「希望格差社会」82）

このように安定した方向性が日本にあった事をまず指摘している。そのような安定した社会構造があっても経済や社会的地位などの「格差」への不満は存在したし画一的な家族生活への不満も存在したが、構造成長期待が不満を抑制（85）していたと述べている。またこのような社会を支える上で、パイプラインとしての学校教育制度の成功（86）を挙げている。

約一〇年かけてかけて、ゆるやかに、自分の希望と現実を調整し、自分の能力に見合った（とされる）職に、パイプラインによって「流し込まれる」のである。今から考えれば、希望とあきらめのバランスがとれた、社会心理的に極めて優れたシステムであった。

（「希望格差社会」90）

「ニート」という現象を考える上でこの「パイプライン」の機能は重要となるが、この点については後述する。

山田は「黄金時代」「希望にあふれた時代」について振り返り分析している。そして「格差」が社会問題とならなかった事について以下の指摘をしている。

「二極化」には、数値で表せる「量的な」格差だけでなく、「質的な」格差が含まれている

生活水準格差の存在や拡大自体が一概に悪いと言っているわけではないし、社会問題に直結するわけでもない。

格差に対する人々の「納得」という要素が重要となる。社会的に述べれば、「格差の正当性」ということになる。格差があったとしても、多くの人が納得する格差（正当と見なされる格差）なら不満は起きない。逆に「納得できない」格差があると感じる人が多い社会は、秩序が不安定になる。この納得という「メカニズム」がうまく働くかどうか、社会秩序の安定や社会発展の基礎となっている。

（「希望格差社会」52 53）

山田は社会安定の基本となる要素について、所得格差の状況よりも「納得」という点に注目しているのである。

日本社会は、多くの人が「中流意識」をもつことになる。それは、生活格差がなくなっていることを意味しない。何度も繰り返すが、人々が自分を中流とランクづけるのは、格差が「量的な」ものだと思われる事、そして、成長によって追いつくことが可能だと希望がもてたことに依存しているのである。

（「希望格差社会」96）

### 3.4 日本の「一億総中流」意識の分析

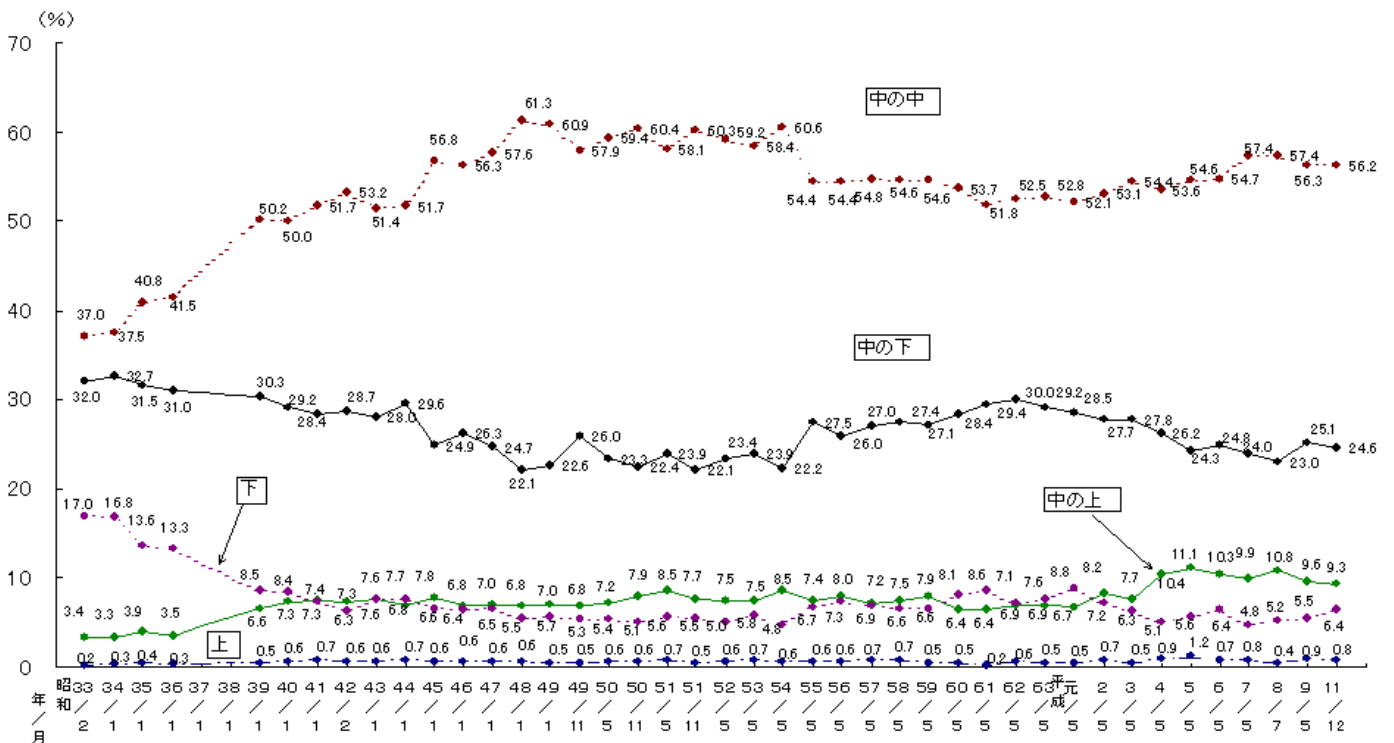
「納得」という行為は自分が自分を評価してなされるものである。山田は日本人の

「中流意識」（「希望格差社会」96）を指摘し、内閣府の「国民生活に関する世論調査」を示している。

この調査には「生活の程度」に関する設問があり「生活の程度は、世間一般からみて、どの程度と思うか」という質問に対して、「上」「中の上」「中の中」「中の下」「下」という選択肢から自己評価を回答してもらう形で行われている

1958年での調査では「中の中」37.0%「中の下」32.0%「下」17.0%である。しかし1972年には「中の中」が61.3%となり過去最高となる。「中の下」22.1%「下」5.5と低下している。以降、第2時オイルショックが起きた1980年前後以外はほぼ横ばいで安定して推移している。

図25 生活程度



(注) 昭和37年1月調査及び昭和38年1月調査では、この質問は行われていない。  
昭和42年2月調査から昭和44年1月調査までは、対象者が世帯主、家事担当者。

内閣府大臣官房政府広報室 「国民生活に関する世論調査」平成15年

<http://www8.cao.go.jp/survey/h11/kokumin/2-1.html>

このように、近年の日本人が日本人観を語る時の特徴とは「一億総中流」という意識



があるのである。「格差」が存在してもそれを「納得」出来ていたので「中の中」という自己認識、つまりたくさんの人々が程よい希望を持つことが出来たのである。

山田はヴェーバーが言う「資本主義の精神」について、現世で「社会的に成功する」ことが、努力の報いにあるという教義である（「格差社会」196）と述べている。そして日本について、教育のパイプラインが機能しており、真面目に勉強して、努力して学校に入れば、それなりの職が保証された。（中略）つまり、勉強、仕事、家事・育児という苦勞、努力は、豊かな家族生活となって報われたのである（「希望格差社会」199）と述べている。

つまり日本人は「資本主義の精神」における報いの実感として「一億総中流」という自己認識を形成したのだ。

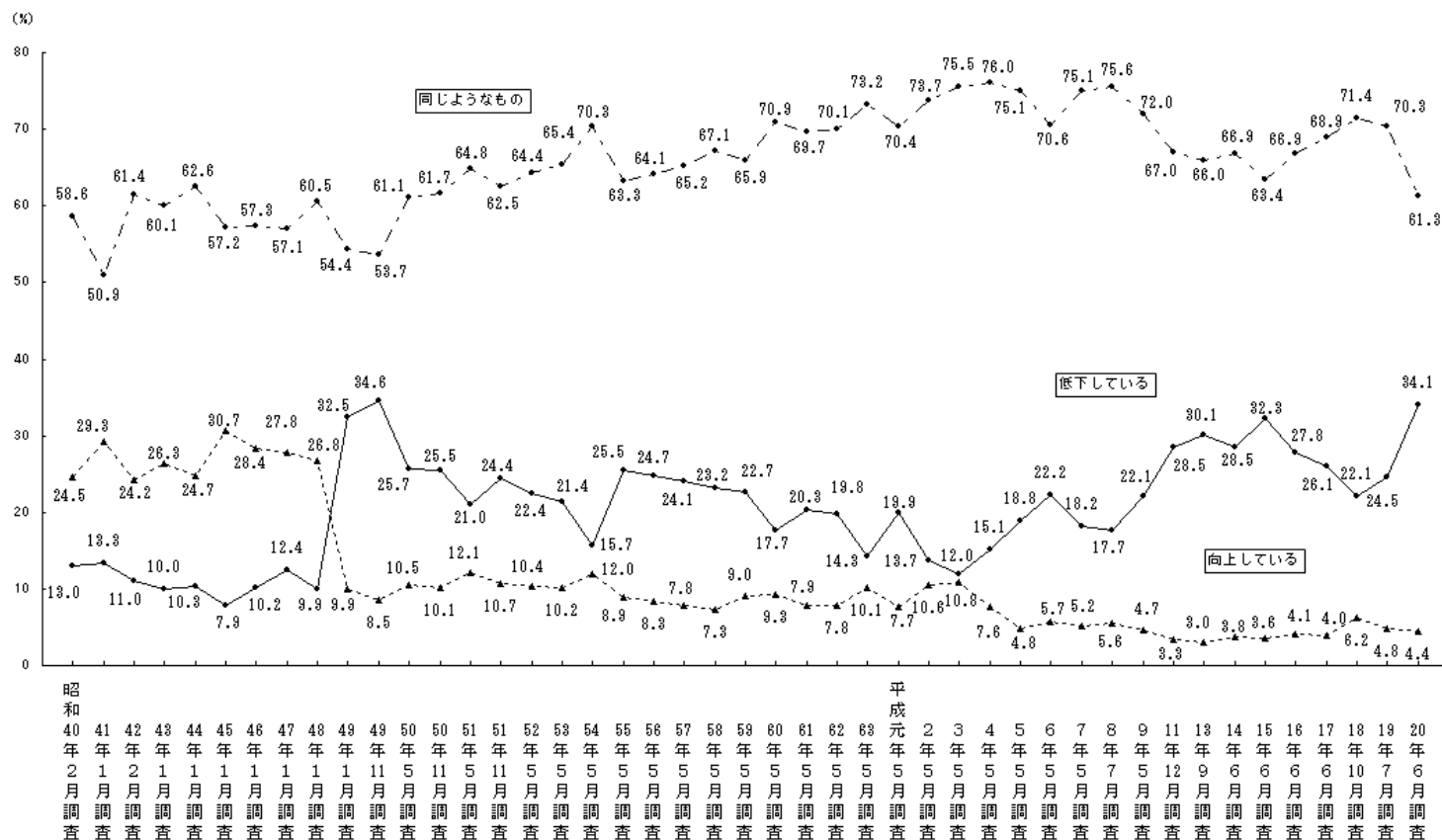
## 4. 「一億総中流」という「信仰」

### 4.1 「一億総中流」の機能

さて、「一億総中流」という意識が日本の高度成長期、つまり「黄金時代」を形成していたものであるが、逆にこのようにも考えられないだろうか。つまり、近代資本主義の労働活動のためには「資本主義の精神」が必要だったのだが、日本人の「中の中」という自己認識を支えるのは宗教的な倫理観と同様の性質を持っているのだと。

内閣府の世論調査では、「去年と比べた生活の向上感」という調査も行われている。「お宅の生活は、去年の今頃と比べてどうでしょうか」という質問に対して「向上している」「同じようなもの」「低下している」という回答を用意して行われている。

図2 去年と比べた生活の向上感



「去年と比べた生活の向上感」 平成20年

<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-life/images/z02.gif>

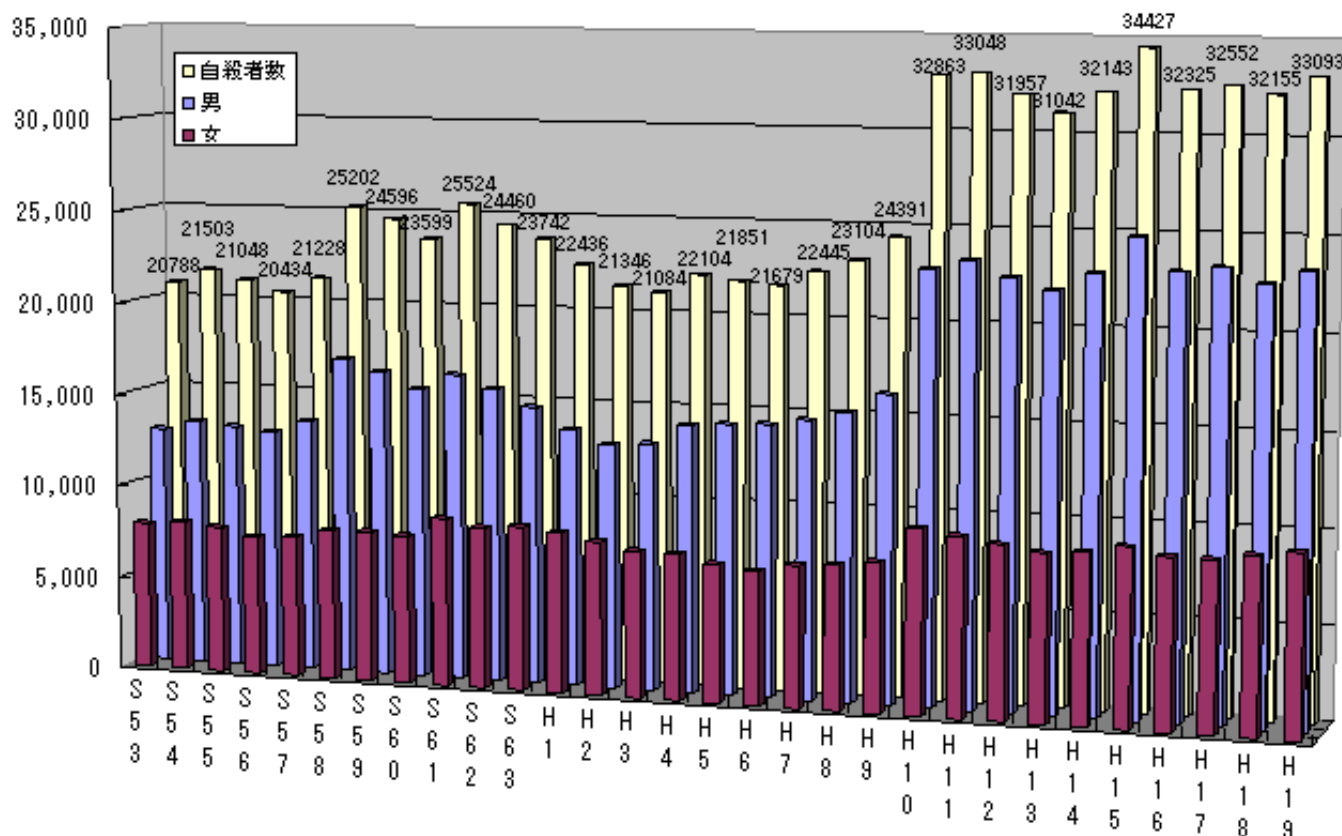
この調査で注目すべきは1990年頃から現在までの傾向である。「同じようなもの」はやや不安定に下降傾向を示している。また、「低下している」は1974年の第1次オイルショック以降の最低を記録した1991年の12.0%から上昇傾向にある。

山田昌弘は一九八八年問題（201）を指摘している。

日本において、希望がなくなる、つまり、努力が報われる見通しを人々がもてなくなりはじめたのが、一九九八年だと私は判断している。これを、一九九八年問題と呼ぶことにしたい

（「希望格差社会」201）

山田はGDP成長率がマイナスになったという経済的な出来事も指摘しているが、「質的」な転換がこの年にあったと考えられる（「希望格差社会」201）と指摘している。自殺数は前年1997年の24691人から1998年には32863人と急増している。



こころのサポートシステム（メンタルヘルス対策事業）

「H20年6月発表 警察庁統計資料」 <http://www.t-pec.co.jp/mental/2002-08-4.htm>

1998年には不安定がついに噴出し社会現象として確かに記録され始めている。このように、「格差」が社会問題として意識される条件が整って来たのだ。「去年と比べた生活の向上感」が悪化傾向にある事は自然であろう。

一方で、「生活の程度」の調査における傾向は1995年に向けてはやや「中の中」傾向を弱めていたが、その後はむしろ穏やかに「中の中」傾向を取り戻している。また「中の上」は調査開始以来の高水準といえる傾向である。

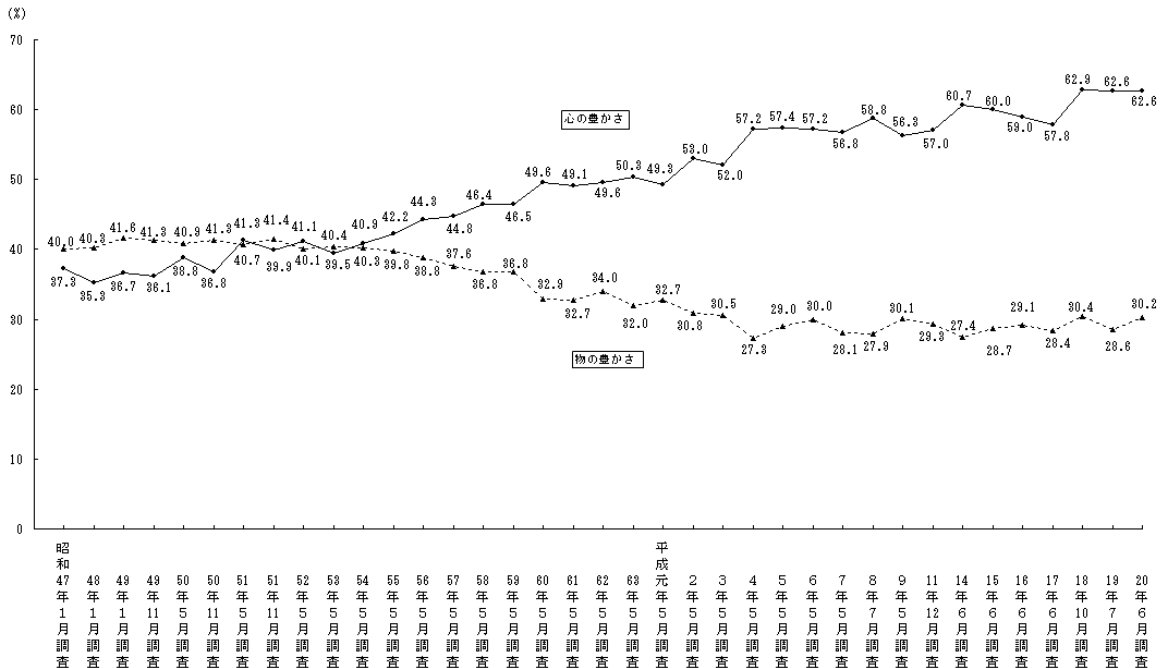
同じ調査における自己認識への回答でありながら「生活の程度」が以前と同じ「中の中」傾向を維持しているのは何故だろうか。「去年と比べた生活の向上感」の傾向に見られるように生活の悪化という目前の事実を認識しつつも「中の中」を自認続けられるこの日本人の心理は何だろうか。

#### 4.2 「一億総中流」という「善」

私はこの一種の乖離的な自己認識を可能にしているのは、近代資本主義の日本を支えた「福音」への「信仰」が現在も存在し続けるからだと考える。実態の経済状況や社会問題が目前にありながらも「希望」を持ち続けるという行為を裏付けるのは「信仰」への期待と祈りがあるからである。日本人は物質的充足でなく、倫理的価値観における「善」を全うする、という基準において生きているのだ。現在の日本人は培われた倫理的価値観を現在も保持し続けている。ヴェーバーが指摘するように、「営利心」でなく「天職」思想と、利己心からは非合理的に思える「職業労働への献身」（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」94）を価値とする倫理的態度に適応し、そして養われた結果として現在の日本人の自己認識を続ける事が可能になっているのである。

このような視点に立つと同調査における「これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか」という調査

図37 これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか



(注) 心の豊かさ → 「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」  
物の豊かさ → 「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」

「これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか」

国民生活に関する世論調査 平成 11 年

<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-life/2-2.html>

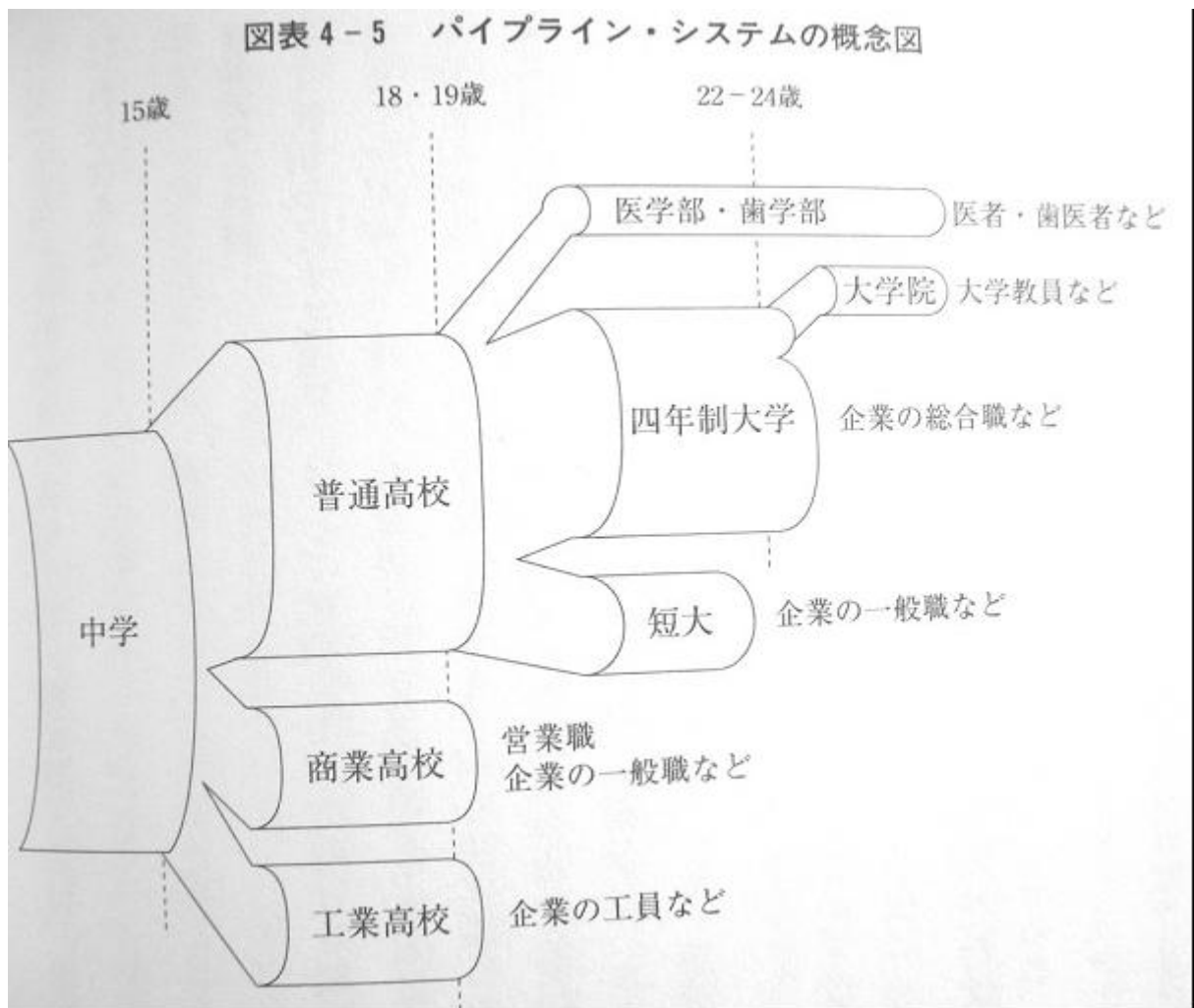
において「心の豊かさ」を選択する傾向が今も強くある事は、ただのポーズや物質的満足の裏返しでなく、日本人は倫理的価値基準としての「善」を追求しようとする傾向にあるのだと解釈できるのではないだろうか。「資本主義の精神」が求められた結果、無宗教国家と揶揄される日本において実は「福音」を求めるといふ強い宗教的倫理価値観が養われたのである。そして、それを基調とする態度が日本人の身に付いたのである。

#### 4.3 「一億総中流」の養成装置

本来のプロテスタンティズムの倫理において重要となるのは「予定」（予定説）である。救いの恩寵にあずかるかは神意によって「予定」され決定されているので、神の栄光を増

すための道具となって「現世的」な諸活動、とりわけ世俗的職業のために刻苦勉強しなければならない（社会学小辞典 新版 544）という倫理である。ではキリスト教圏とは言えない、というより一般的な価値観として「宗教」を共有しない近代資本主義の日本において「予定説の一種の代用品」（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 261）として具体的に機能したのは何であろうか。

ヴェーバーは「より高潔な生涯」や「第二の祝福」への努力が予定説の一種の代用品として役立った（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 261）と述べている。日本において、宗教的な禁欲的態度を持って「より高潔な生涯」や「第二の祝福」を目指す努力によって行われるものとは何かを考えるにあたり、「希望格差社会」にて山田が指摘する「教育のパイプライン・システム」にもう一度注目したい。



ハーバード大学の研究員ダニエル・ヤンミンとチャン・マイミンは、戦後日本に普

及した教育システムを、パイプライン・システムと名づけた。(中略) 枝分かれしながら、就職という最終目的地に向かって、スムーズに流れていく様子をパイプラインと名づけたのだ。

(「希望格差社会」 88)

「希望格差社会」において山田はパイプライン・システムの機能を説明する中で、教育学者の竹内洋の「学歴中流願望の盛衰と含意」における「ガンバリズム」を紹介している。

ガンバリズムが成り立ったのは、受験勉強をがんばることが、現実によい職業に就く(女性にとっては、よい職業に就いている男性の妻となる)という結果になって報われたからともいえるのだ

(「希望格差社会」 164)

一方で、「パイプライン・システム」にある問題点も指摘している

もう一つの問題点は、パイプライン・システムに本質的な問題である。(中略) パイプライン通過中の知識や技能の修得よりも、パイプラインの分岐対策、つまり、受験勉強の方が重要になるという点である。(中略) 戦後日本社会は、学校における教育内容にはあまり期待せず、受験での成績(基礎学力や忍耐力のレベルを表す)や企業等に入社後の知識、技能習得(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)を重視するというシステムをとってきた。極端に言えば、パイプライン・システムに乗っていさえすれば、特定の職業に就けるという見通しがもてたのである・

つまり「パイプライン・システム」が実質担う機能とは、高度教育というより勤勉な態度の育成だったと言える。

#### 4.4 「一億総中流」が信じるべき「福音」

近代資本主義を実現したシステムが能力よりも勤勉さの養育を重視していた事は理にか

なっていた。ヴェーバーは「天職」について以下に述べている。

こうした心情は、決して、人間が生まれつきもっているものではない。また、高賃銀や低賃銀という操作で直接作り出すことができるものでもなくて、むしろ、長年月の教育の結果としてはじめて生まれてくるものなのだ。

(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 67)

つまり、近代資本主義において重要なのは、必要な労働に適応できる倫理的態度を育成する事だったのである。そして日本の「パイプライン・システム」において重要な機能だったのは「結果」として高等教育がなされる事ではなく「過程」の中で「ガンバリズム」が養われ強化される事なのである。日本の高度成長を支え新たな基調「ライトモチーフ」(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 65」)となったものは、まさしく「資本主義の精神」としての「ガンバリズム」である。日本人が近代資本主義において身に付けた心理とは宗教的倫理の代替だったのである。

日本人にとっての「資本主義の精神」が宗教的倫理の代替として機能している事は、小原克彦によって問題を指摘する形で述べられている。

ルーチン化された日常や、終わりの見えない繰り返しを耐えなければならない現代人(受験生はその代表であろう)にとって、その日常を強制的にぶち切る外的な力は魅力的なのである。「終わりなき日常」からの脱出へと駆り立てる終末論的な力は、現代社会の内部で醸成されている。教師や親といった現代の預言者(あるいは偽預言者か)によって示された人生成功の道から、時折、無性に脱線したくなるのにもそれなりの理由がある。

(「現代世界を生きる『私』—自己を映し出す鏡としての原理主義」、『Azest』(増進会出版社) 2002年5月号 2009 1 25)

<http://www.kohara.ac/essays/azest200205.pdf>

教師や親といった現代の預言者によって道を示された受験生が「終わりなき日常」に抑圧され、終末論的な力に駆り立てられるというのだ。このようにネガティブな形であるが「ガンバリズム」とはキリスト教的な性質を持つ事が指摘されている。



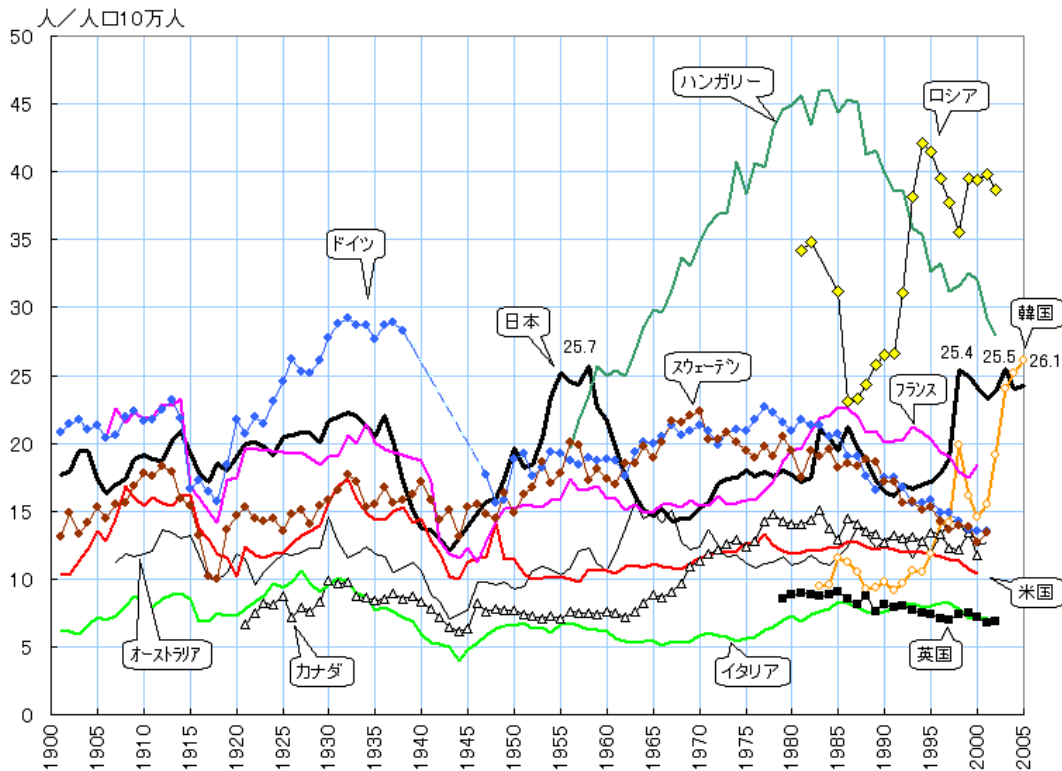
## 5. 「ガンバリズム」主義者の倫理

### 5.1 「ガンバリズム」主義者の性格

日本人は「資本主義の精神」として「ガンバリズム」という宗教倫理を身に付けたという解釈を行えば、近年の近代資本主義国郡の中で日本と韓国の自殺率が郡を抜く事も踏み込んだ分析が可能である。日本は「宗教」の不在も指摘されるが、世界的に見れば日本と韓国は儒教圏である。そして、欧米諸国と大きく違う事は「キリスト教」が顕在しているか否かである。キリスト教では教義における自殺の否定が教育される事の影響も大きいし、自殺かわりに貧困層に肥満問題が発生するアメリカの例もある。しかし、最も大きな違いは「資本主義の精神」をキリスト教の延長として理解できるか否かではなからうか。

キリスト教が顕在する社会にとって「資本主義の精神」とは「倫理」なのであるが、日本人や韓国人にとっての「資本主義の精神」とは「努力」である。つまり、欧米諸国においては「倫理」を「見守る」キリスト教が社会に存在するのである。「倫理」の危機においてはその延長上に教会などの社会システムがセーフティネットとして準備されているし、宗教的な文脈においてその危機を理解する事が出来る。しかし、日本人や韓国人にとって「資本主義の精神」とは世俗的な「努力」でありその精神の由来はあくまで個人の資質にあると考えられやすいのである。そのため「資本主義の精神」という「努力」が危機に陥った場合の解釈に不備が生じるのである。近代資本主義国家における自殺率推移について、「資本主義の精神」を社会が解釈する時にキリスト教を想定出来るか否かがその傾向を決めると分析する事も出来る。「倫理」問題として危機を解釈するセーフティネットが不在のまま「資本主義の精神」とは「努力」であると解釈して発展すると、自殺率の増加が示すようにそれは生きるための「情熱」というより「熱狂」「狂信」というような暴走と虚無の状態に無自覚に陥りやすくなるのではないか。

主要国の自殺率長期推移(1901~2005)



(注)東西ドイツ時代のドイツは西ドイツ。日本の2005年は年計概数。

(資料)厚生労働省「平成16年度人口動態調査特殊報告」他、Korea National Statistics Office (韓国)

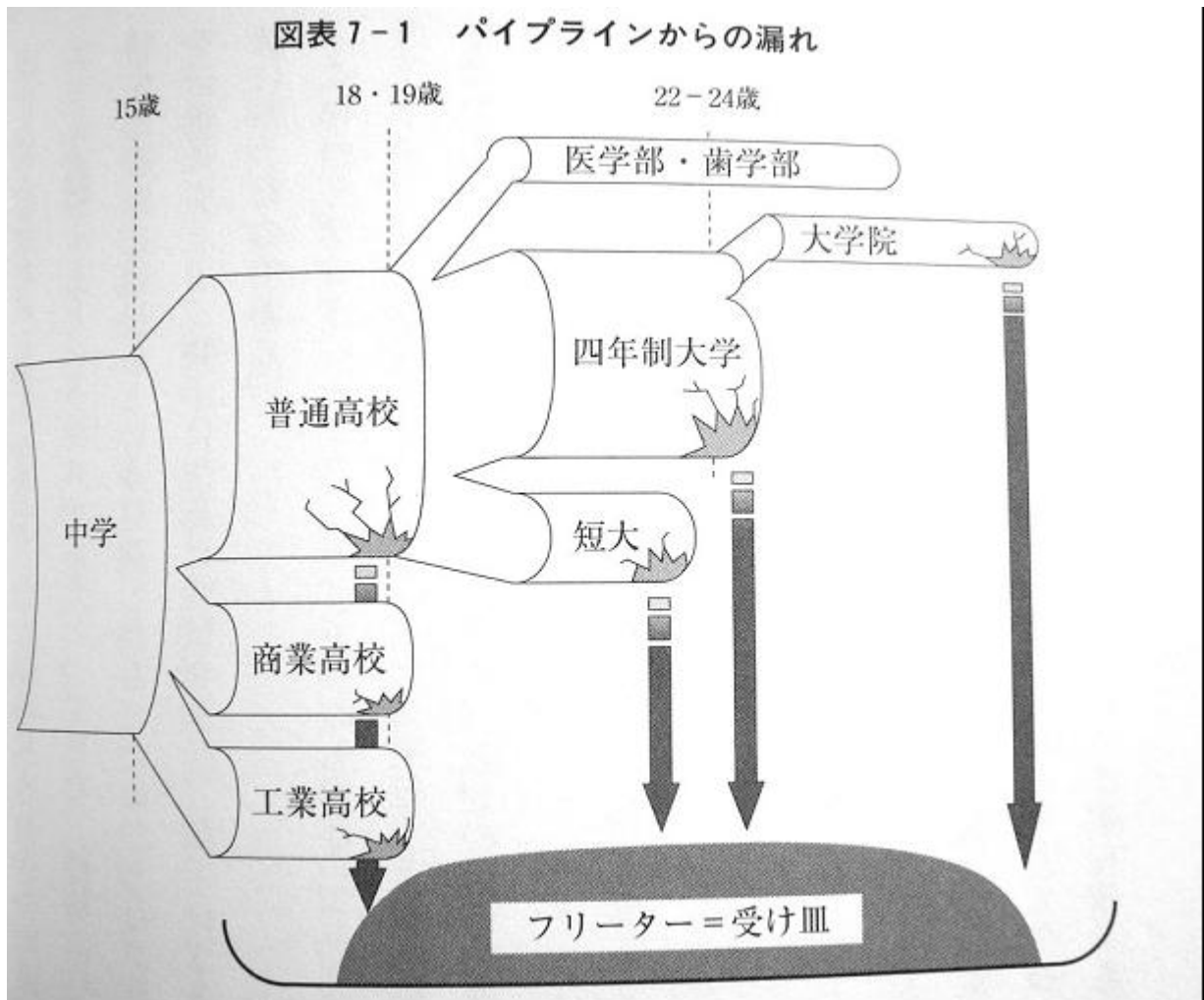
図録▽主要国の自殺率長期推移 (1901~)

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2774.html>

つまり日本においては、「予定説の一種の代用品」(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」261)が世俗化し具体化した存在として「教育のパイプライン・システム」があり、その中で日本人は倫理的価値観をより強化していったのである。また、培われた「資本主義の精神」をキリスト教圏のように「倫理」として解釈する事が難しい構図を抱えてしまっている。このような視点に立てば「ニート」にかかわる言説が複雑に入り組んでしまうかについても違う視点で眺められる。

5.2 「ガンバリズム」主義者の信仰危機

「希望格差社会」において山田は「パイプラインの漏れ」(「希望格差社会」165)を指摘している。



今の日本で、教育で生じている問題点は、パイプラインが機能不全に陥っていることに由来する。それも、ヤンミンとマイミンがいうようなパイプラインの崩壊が生じたのではなく、パイプラインが傷み始め、各所に亀裂ができ、そこから「漏れ」が生じていると私は判断している。「あるパイプラインに乗っているはずが、いつのまにか、パイプラインにできた亀裂から漏れてしまい、下に落ちていく生徒、学生が出てきた」というのが現状をもっともよく表す比喻だと思う。漏れ出しは、大学院—大学の教員と流れる超高学歴ラインから、高校—企業の正社員と流れる高卒就職コースというラインまで、例外はあるもののほとんど全てのパイプラインで起こっている。

(「希望格差社会」166)

日本における「予定説の一種の代用品」（「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」261）である「パイプライン・システム」は「パイプラインからの漏れ」として指摘される機能不全を起こしている。顕在的な機能の不全はフリーター問題として観測されているが、潜在的な問題とは日本における「資本主義の精神」が危機に直面している事である。今まで「信仰」の対象であった「パイプライン・システム」への信頼とその実感が崩れた事が問題なのである。現在の日本における不安定とは宗教的倫理の危機という性質を併せて持っている。

### 5.3 「ガンバリズム」主義者の絶望

問題を深刻化させるのは心理的危機を「倫理」の問題として理解する下地が日本や日本人に欠けていることなのである。「パイプラインの漏れ」に伴って発生する不安定の理由について、フリーターの発生という顕在的な出来事にその理由を強く求めてしまうのである。経済的な要因や状況という明確で目前にある不安定が理解される一方で、同時に発生する「信仰」の危機という不安定が理解されないのである。たとえば「フリーター」という問題の解決に、「信仰」への危機という性質の違う問題の解決も無自覚に求めてしまうのである。

このように、現在の日本人には現在の危機に対して入り組んだ自己認識があるのである。だから、フリーターの問題と関係して「ニート」という言葉が強く関係する事、またその場面における「ニート」という言葉がしばし定義を逸脱する事もこのように解釈する事が出来る。つまり、「ニート」という言葉とは、その言葉を叫ぶ事とは、「信仰」が崩れた「絶望」を表現するのである。

## 6. 「福音」を求める人々

### 6.1 「福音」としての「ネオリベラリズム」

「ニート」という現象の背後には日本に「予定説の一種の代用品」への「信仰」が崩れたという潜在的な問題がある、という視点に立った。それでは、この視点から日本における不安定の問題にある言説について見つめ直す。

「生きさせろ！」で雨宮は入江公康に質問する形で日本におけるネオリベラリズムとフリーターの関係を描いている。

彼はこの社会を「ネオリベラリズム」（新自由主義）という言葉でわかりやすく分析する。どうやらこの状況は、「ネオリベラリズム」という聞き慣れない言葉がもたらしたものであるらしい。「雨宮」（本稿筆者注）

（「生きさせろ！」 240）

『保護』の規制があると邪魔だから、企業に都合のいいよう、いつでも切ったり貼ったり、使い捨てにできようになりたいということです。規制緩和、あるいは民営化をやたら強調する、こうした経済のありようを新自由主義＝ネオリベラリズムといいま

す。

このネオリベラリズムの潮流が現在の『格差』といわれるものを露骨に生んでいるわけです。「入江」

（「生きさせろ！」 242）

労働環境は劣悪化しました。こういうふうに労働者が互いに競争させられ、『生き残る』ことだけが目的になってしまう。「入江」

（「生きさせろ！」 242）

——しかし、ネオリベラリズムという言葉は日本では何をさすか多くの人にとってはわからないと思います。「雨宮」

（「生きさせろ！」 246）

——しかし、そんなネオリベ政策を進めた小泉を不安定な若者こそが支持したというところもありました。「雨宮」

（「生きさせろ！」 247）

「民営化や規制緩和が進めば、現在つらい環境にいる人にとっては、企業の上の方で

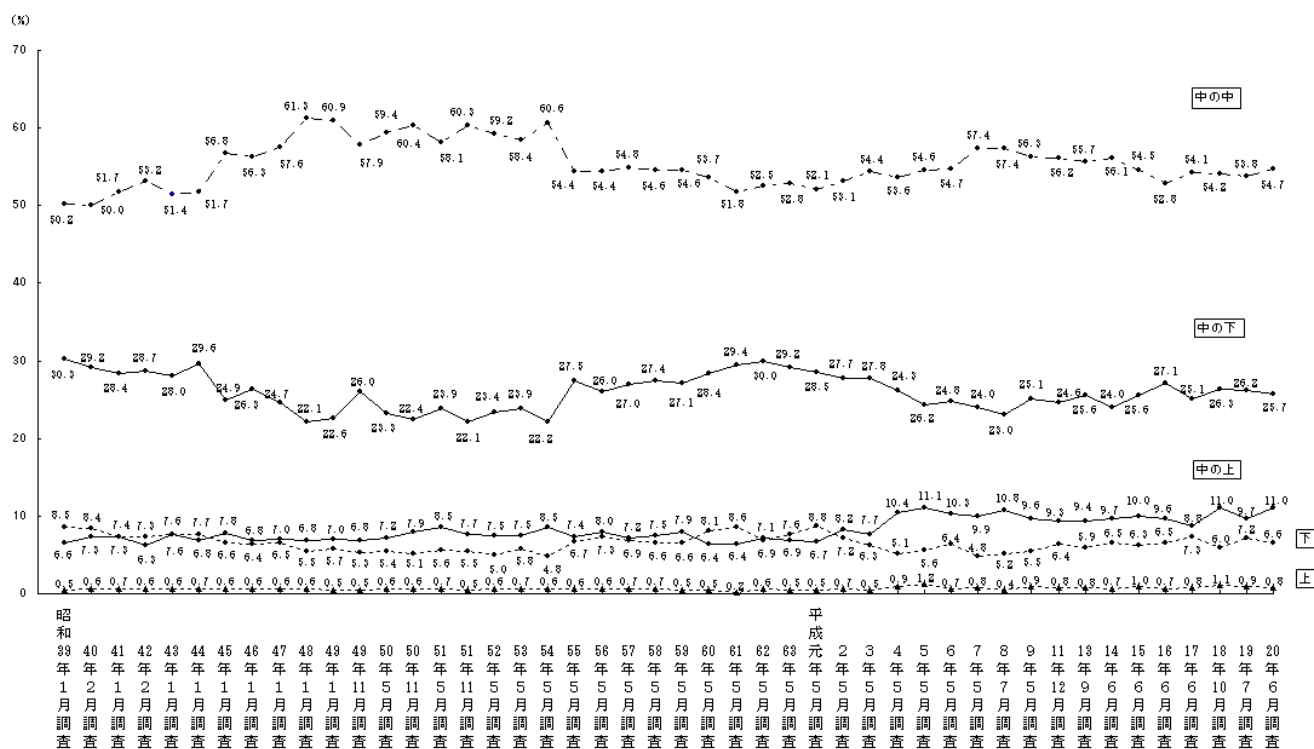
甘い汁を吸っている正社員を排除できて自分たちが上昇できるとか、そういううらみ  
つらみが働いているかもしれないですね」「入江」

(「生きさせる！」247)

日本におけるネオリベリズムの台頭過程で、それを取り入れる日本人の心理はやや屈折している。その背景についても日本人の「信仰」との関わりとして解釈する事が可能である。

内閣府調査の「生活の程度」において「中の中」が現在も横ばい傾向にある事は述べた。

図31 生活の程度



「生活の程度」 平成 20 年

<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-life/2-1.html>

注目すべきは 1989 年以降の「中の上」の動向である。1989 年（平成元年）は 6.7%で、  
それまでも 6.5%前後で横ばいの推移をしていた。しかし 1990 年に 8.2%と急上昇し 1993  
年には 11.0%と最高を記録しそのまま高水準で現在に至っている。

1987年から1991年はバブル経済の発生と崩壊が起きている。この時期と前後して「中の上」が急上昇した事は、「一億総中流」という日本社会において「経済的なさらなる上昇」を期待する一定層が発生したと理解できる。正確には「一億総中流」という「信仰」から亜流の「信仰」が分派したとも解釈出来る。しかし、バブル経済は1991年に崩壊したのだが、「中の上」という亜流の「信仰」は現在も高水準のまま保たれている。この事は、急先鋒の「信仰」の現在の対象として日本における「ネオリベリズム」が機能しているからだとも考えられる。

入江は日本におけるネオリベリズムの不安定さを指摘している

正社員を叩くにしたって雇用の足元を掘り崩すのだから、結局は自分にふりかかってくることになる。そういう鬱憤晴らしの側面があるのではないのでしょうか。自民党をぶっ壊すとか、抵抗勢力を潰せとか、改革断行みたいな威勢だけで支持して気持ちよくなってしまっている。もちろんそういう気持ちはわからなくはない。実際その正社員によって差別待遇を受けたりするのが、非正規労働者なわけですから。正規も正規で、非正規に心をよせるということをしてない。ともかくそれでよくなるというのは幻想でしょう、余計に環境が悪くなるだけでしょう。「入江」

(「希望格差社会」247)

日本においてネオリベリズムを志向する傾向とは、制度や経済の問題でなく多分に感情的なものだということである。「自民党をぶっ壊す」というキャッチフレーズも、「一億総中流」という「中の中」「信仰」の行き詰まりを、「中の上」「信仰」によって改善できるのではないかという期待の現われではなかったのか。日本において「ネオリベリズム」がもっとも輝かしいものとし期待された時期だったとも言える。

## 6.2 「福音」の原理主義化

日本における「ネオリベリズム」の空気について述べたが、ネオリベリズム（新自由主義）の性質について述べる。そのために内橋克人の「悪夢のサイクル」における記述を紹介する。

内橋は1995年に発行された「規制緩和という悪夢」で以下のように書いた事を述べて

いる。

「日本の規制緩和運動は、いわは、たいへん危険な劇薬を患者に副作用を全くしらせずに投与しようとしているのと同じである。

医療の場合であれば、それでも、作用も副作用も一人の患者に限って現れるだろう。一人の患者がプラスとマイナスの効果を得ることができる。しかし、規制緩和の場合問題なのは、プラスの効果が働く場所とマイナスの副作用が現れる場所が違うということである。つまり、権力の決定機構に近い投資家、大手企業グループ（そこに働いている個人でなく、法人）、都市生活者、といった集団は当面プラスの作用をうける。しかし、日本の中流層をなしていたサラリーマンを含む勤労者、中小企業、地方生活者、年金生活者といった集団は、激流のなかに放り出され、多くの人々が辛酸を嘗めることになるだろう。現在までのところ、日本の規制緩和運動という治療法は、プラスの作用が働くと思われる人々の手によって一方的に決められている」（『規制緩和という悪夢』

（「悪夢のサイクル」 22）

内橋は規制緩和において現在の日本が直面する問題についての的確な予測をしている。内橋は 1970 年代後半からアメリカで始まった「規制緩和」、1960 年から起きた変化の波を俯瞰することでおおきな仮説を確信するに至ったと述べている。（「サイクル」 22）

内橋は 1970 年代末のアメリカで起った 3 政策の変更を変化のはじまりと述べている。

- 一、それまで規制下にあった産業を自由化する
- 二、累進課税をやめる。
- 三、貿易の自由化。

（「悪夢のサイクル」 26）

内橋はこのうち、一と二は、まさに日本で一九八〇年代後半以降、おこなわれた政策（「27）と指摘している。

内橋は日本の先駆けとなったアメリカにおける反応を紹介している。

航空自由法の制定に関わりながらも、規制緩和は労働者の安全を脅かすと考え八〇年代には反対したポール・デンプシーは以下のように語ったという事である・



「もし、あなたが日本で規制緩和しようと言うなら、こう理解しておけばいい。要するに規制緩和とは、ほんの一握りの非情でしかも貪欲な人間に、とてつもなく金持ちになる素晴らしい機会を与えることなのだ。一般の労働者にとっては、生活の安定、仕事の安定、こういったものすべてを窓の外に投げ捨ててしまうことなのだ」(前掲書)

(「悪夢のサイクル」 29)

またジェームズ・スティーラーとドナルド・バーレットという、『AMERICA:WHAT WENT WRONG?』(日本語版「アメリカの没落」)における調査を担当した記者に協力を求めた時、これから規制緩和をしようという日本にバーレットが発言した内容を述べている。

「要するに規制緩和とは、これまでの公平なアンパイアのいたゲームからアンパイアをのけてしまうということだったのです。ゲームは混乱し、何でもありの世界になりました。ところが多くの人々は『規制緩和』という言葉を経済学者が振りまいた時、ルールが変わってしまうということには無自覚でした。皆が、何となく善くなるという錯覚を持ったのです。結局、そうした人々はゲームから弾き出され、得をしたのは、権力の中核にいてルールブックが変わることをよく自覚していた一握りの人々でした」(前掲書)

(「悪夢のサイクル」 30)

先駆けとなったアメリカを日本はなぞる形で「規制緩和」を行い、そして社会を変化させていったのだ。アメリカでは乗っ取り屋の横行(「悪夢のサイクル」 31)によって被雇用者の困窮や労働の質の低下など労働環境の悪化を起こす企業買収が平然と行われるようになった。日本における村上ファンドの企業買収のしかたも、同じ文脈で理解できる(「35)という事である。規制緩和で「得をしたのは、権力の中核にいてルールブックが変わることをよく自覚していた一握りの人々」だった(悪夢のサイクル「」 35)という事だったのだ。

このように一極に富裕層が集中する政策を取りながら、税制のフラット化(「悪夢のサイクル」 56)を進めた。アメリカと日本でのこの政策に関する施行者の発現として以下が紹介されている。

こうした金持ち優遇の減税策を導入するときに、レーガン大統領が使ったレトリックが「トリクルダウン・エフェクト」というものでした。

つまり金持ちに自由になる金を増やせば、彼らが金を使い、経済が刺激される、という理屈です。トリクルダウンは「水がしたたりおちる」とでも訳せばよいでしょうか。

(「悪夢のサイクル」 60)

日本でも、まったく同じことを言っていた人がいます。

小泉内閣で構造改革をおしすすめた経済学者の竹中平蔵氏です。

二〇〇〇年七月の「日経ビジネス」で竹中氏はこう発言しています。

「経済格差を認めるか認めないか、現実の問題としてはもう我々に選択肢はないのだと思っています。みんな平等に貧しくなるか、頑張れる人に引っ張ってもらって少しでも底上げを狙うか、道は後者しかないのです。米国では、一部の成功者が全体を引っ張ることによって、全体がかさ上げされて、人々は満足しているわけです」(七月一〇日号)

(「悪夢のサイクル」 61)

以上を述べた上で内橋は、人々は満足しているでしょうか？ (61) と疑問を投げ掛けている。

ネオリベラリズムの性質について「悪夢のサイクル」からの紹介を続ける。ネオリベラリズムの始祖としてミルトン・フリードマンが指摘されている。彼は「市場原理主義」の思想的源流の一人である。その原理の根底には「国家からの自由」(「悪夢のサイクル」 81) を志向しているのだが、それは経済分野において当時主流だったケインズ主義にとって代わることになった。主流であったケインズ主義については以下のような紹介がある。

ケンブリッジ大学でケインズに師事し、アメリカ経済学会会長も務めた経済学者のジョン・ケネス・ガルブレイスは「大恐慌のあとに資本主義は学んだ。破綻を避けるためのビルトイン・スタビライザー、安定化装置を自らの中に取り込んだ」と述べています。

（「悪夢のサイクル」 85）

以上のような特徴のケインズ主義経済であるが、インフレ率のコントロールにおいて新自由主義による実験の劇的な効果のよって政権中枢から去ることになった（「悪夢のサイクル」 88）。

以後米国の経済政策において主流となる自由主義は、米国の世界的な戦略方針への大きく影響し始める。フリードマンの自由主義的政策は南米における経済政策の思想的バックボーンとなった（「悪夢のサイクル」 103）。チリではピノチェト政権下で原理的な自由主義経済政策を行った。80年代終わりから90年代にかけて順調な成長を見せたので「南米経済の優等生」ともてはやれるようになった（「悪夢のサイクル」 104）。

しかし内橋は「ラテン・アメリカは警告する」において行われた検証からこの成長に疑問を投げ掛けている。ピノチェト政権は「一九二九年以来の世界恐慌以来の未曾有の大不況」（「悪夢のサイクル」 108）によって政策修正を余儀なくされる。その後コンセルタシオン（民主主義のための政党合意）と呼ばれた新政権（「悪夢のサイクル」 109）によって社会的政策が大幅に見直されたのである。そして「南米経済の優等生」ともてはやされた「チリの奇跡」の真実を以下に述べている。

このコンセルタシオン政権下の経済成長が世界的に注目されたわけですが、その成功は、決して新自由主義政策によるものでなく、むしろ行きすぎた市場原理主義への反省の上に立って、貧困問題や社会格差の縮小に真剣に取り組んだ結果であることは明らかです。従って、これをもって「市場主義の勝利」といった言い方をするのは、完全な間違いです。（「悪夢のサイクル」 110）

内橋はさらに「ラテン・アメリカは警告する」で佐野誠が展開した、アルゼンチン経済における新自由主義改革の失敗を指摘している。

一九七六年、やはりクーデターによってビデラ軍事政権が成立し、チリと同様の新自由主義的な改革がおこなわれました。

国内市場は活況を帯び、当初、功を奏したかに見えました。しかし一九八〇年には（中略）一転して大不況に陥ります。

経済危機から国民の目を逸らそうとして行った、イギリスとの間のフォークランド紛争にも敗北、ここに軍事政権は崩壊します。

(中略)

こうした八〇年代の経済混乱の時代を、アルゼンチンの「失われた十年」と呼びます。

(「悪夢のサイクル」 110)

九〇年代に入ると、アルゼンチンは八〇年代の国内産業保護政策を一転させ、九一年に就任したカバロ経済大臣の主導の下、(中略) 七〇年代に続く二度目の新自由主義改革「カバロ・プラン」を実施しました。

チリは、「新自由主義」によって市場の振幅が大きくなると、「市場」を制御する道を選択しました。アルゼンチンは逆に、さらなる「自由化政策」をもって解決しようとしたのです。

これはアルゼンチン経済の「ラプラタの奇跡」として、当時、やはり新自由主義政策の勝利のごとく喧伝されました。

ところが九七年にアジア通貨危機が南米にも波及、(中略) 二〇〇一年には深刻な金融危機が国内にも影響し、二〇〇二年には両替や預金引き下ろしなどすべての国内銀行業務が、中央銀行の通達によって停止され、アルゼンチン経済は大混乱に巻き込まれます。

(「悪夢のサイクル」 112)

このように新自由主義によってもたらされるバブル活況は实体经济を道連れにして国家経済を破綻させてしまう(「悪夢のサイクル」 113) のである。新自由主義政策が必然的に呼び込もうとした景気循環を、佐野誠教授は「新自由主義(ネオリベラリズム) サイクル」と命名(「悪夢のサイクル」 116) したのである。

内橋は一九八六年から始まったバブルとその崩壊による経済社会問題を挙げ、日本は、ネオリベラリズム・サイクルがちょうど一巡しようとしているところ(「悪夢のサイクル」 117) と指摘している。このサイクルと日本を照らし合わせ「失われた十年」が理解でき、そしてもう一度バブルと「失われた十年」を繰り返そうとしていると指摘している。

ネオリベラリズムにおける経済活動の性質について述べたが、それを推進する自由主義を推進する人物像について触れる。

竹中氏は「頑張った者が報われる社会をめざすべき」として、累進課税の見直しなどを主張したわけですが、そこで述べている内容は、フリードマンが豪邸を前にテレビで説いた「勝者の理論」そのものです。フリードマンが新聞配達しながら自らの才能でアメリカン・ドリームを体現し、「努力した者が報われるのだ」と語ったように、竹中氏が「頑張った者が報われる社会」を訴えるときも、念頭にあるのは、努力して大臣にまでなった自分自身の姿ではないでしょうか。

（「悪夢のサイクル」 126）

ネオリベラリズムにおけるこのような性格は単に一個人の個性によるものではない。ネオリベラリズムはについて戦争との親和性（「悪夢のサイクル」 161）について言及されている。

ネオリベラリズムは、小さな政府を標榜しながら、実は、軍事に関しては大きな政府という形態をとります。チリ、アルゼンチンの軍事政権が、膨大な軍事費を国家予算で支出しながら、自由化政策をとった例を思い出してください。

（「悪夢のサイクル」 162）

ネオリベラリズムにおいてなぜ軍事が重要になるか、内橋は以下に述べている。

ソ連邦が崩壊し、東欧が資本主義化することによってマネーの市場は広がりました。このマネー資本主義と唯一違う価値観の文化圏があります。それがイスラム圏です。

規制緩和に協力的だった日本とは反対に、市場主義を布教するアメリカにとって最も手強い障壁となっているのが、実はイスラム圏なのです。

イスラムの世界では、「正当な労働の対価以外は受け取ってはならない」という戒律があります。市場主義にとって最も脅威になるのは、そのような考え方です。人々の宗教的信念、信仰、そういうものを打ち崩さない限り、マネーが自由に動けません。

IT マネーというものは、イスラムの教えから見ると悪であり、脅威であるわけです。

が、一方でマネーの側から見ると逆にイスラムの教えが脅威となるわけです。

マネーは全世界を一つの市場としなければ、完全にグローバルでなければ、本当の意味では完成しません。少しでも例外があると非常にハンディを持ちますから。

加えて世界のエネルギーの主要な部分を握っている国々がイスラム圏であるということもあります。

(「悪夢のサイクル」 163)

IT マネーが完全なグローバルを求め少しも例外を認めない理由は、インターネットのような IT 技術はデジタル、またはデジタル的な性格であるので、少しでも「異質」なものに遭遇すると「エラー (プロトコル・エラー)」を起こし全く接続が出来ず流動が遮断されてしまう事をイメージするとわかりやすいかもしれない。

イスラムにおける金融機関は市場主義から眺めると不要な高い倫理観を持って運営されているのである。そのような価値観下では流動性の高すぎる金融行為を倫理として厳しく制限されているのである。内橋は以下にその性質を述べている。

西欧資本主義的な社会における銀行とは違って、投機はしない。

そして、やる気がある人に、お金がなければ、銀行が生産設備をつくって、そこで働きましようというやり方なのです。

私はイスラム世界が資本主義に取って替わるものだとはだとは考えていませんが、イスラムはやはりマネー資本主義に対抗している現実であり、資本経済をより健全なものにしていく上で大きな価値を持つ対抗思潮であると考えています。

(「悪夢のサイクル」 165)

「悪夢のサイクル」では自由主義思想の祖であるフリードマンについて以下のエピソードが紹介されている。

一九六五年に、フリードマンがイギリスの通貨ポンドの空売りをしようとしたというものです。今の価格で空売りしておけば、実際に切り下げられたときには確実に儲かるのです。そこでフリードマンは銀行に行き、「一万ポンド空売りしたい」と申し出たわけです。

ところがその銀行のデスクはフリードマンの申し出に対して、「われわれはジェントルマンだから、そういうことはやらない」と言って断ったのです。

アメリカでは大恐慌の後の一九三四年に銀行法が改正され、「銀行は冬季と言う反社会的な行動、あるいはそういうプロジェクトに貸し付けをしてはならない」という条項が入っていたのです。銀行のデスクは、その条項を忠実に守ったわけです。

(「悪夢のサイクル」 95 略アリ)

以上の出来事でフリードマンは「資本主義の世界では、儲かるときに儲けるのがジェントルマンなのだ」(「悪夢のサイクル」 96) と言い、指導者から破門されている。イスラムの金融やこのエピソードにおける銀行デスクの「ジェントルマン」にある倫理基準はフリードマンの自由主義思想とは相容れないのであろう。

### 6.3 「福音」として日本に起きた「ビッグバン」

このようなネオリベリズムという世界的な動きは日本では「労働ビッグバン」という言葉で観測できる。以下では牧野富夫編著 (生熊茂実 今村幸次郎 藤田宏 著) の「労働ビッグバン」2007 (新日本出版社) での「労働ビッグバン」という新語の説明を紹介する。

「労働ビッグバン」では、その時期区分を以下に示されている。

派遣労働を前例として認める労働者派遣法などが制定された一九八〇年代半ばから約一〇年が「ビッグバンの前史」です。日経連の「新時代の『日本的経営』」が発表され、それを推進するため政府が矢継ぎ早に労働法制の改悪を強行するようになった九〇年代の半ばから約一〇年が「ビッグバンの第一弾」です。そして「労働ビッグバン」と命名され、憲法「改正」と一体で究極の「労働市場改革」が構想されるようになった〇六年前後から約一〇年が「ビッグバン第二弾＝総仕上げ」となります (政府・財界が一〇年計画だとしています)。

「労働ビッグバン」 13 p

以上であるが、本稿においては政策上の「変化」の目的や結果についての善悪は問わ

ない事を留意して欲しい。

「労働ビッグバン」の影響の記述を続ける。一連の「労働ビッグバン」が目指すのは雇用形態の改革である。「新時代の日本的経営」では雇用の流動化を促す事を大きな目的としていた。

労働者は三つのグループ——①長期蓄積能力活用型グループ、②高度専門能力活用型グループ、③雇用柔軟型グループにわけられることになりました。

(「労働ビッグバン」 64)

このように雇用形態を3つのグループとして再構成するために、派遣事業の規制緩和などの法改正が実行された。併せて累進課税の改正、資本行動の自由化も行われている。この一連の経済構造の改革は、新しい産業活動を日本においても活発化させるという必要に応えていると言える。

新しい産業活動においては中核となる①長期蓄積能力活用グループ②高度専門能力活用型グループが中核となり、③の雇用柔軟型グループが周辺の単純労働を担うことになる。その事について「希望格差社会」(山田昌弘 2004 筑摩書房)から引用し説明する。

現代社会は、グローバル化やIT化が進み、モノよりもサービスが優勢になる時代である。そして、なによりも、生活するには困らない程度の豊かな社会が実現している。そこでは、豊かになった消費者が求める多様な商品を、より安く提供しなければならないという圧力が加わり続ける社会である。

もう一通りのモノを持っている現代社会の消費者は、ただの「モノ」では満足しない。そこでは、他人との差異を消費したり(ボードリヤール)、美的感覚(クールサー—内閣府『未来生活懇談会報告書』)と求めることになる。

(「希望格差社会」 105)

一九九〇年頃から顕著になる新しい産業形態は、雇用を二極化させる。

企業は、ニューエコノミーの中で生き残るために、クリエイティブな能力、専門知識をもった労働者を必要とする。それと同時に、マニュアル通りに働く単純労働者も必要とするのである。

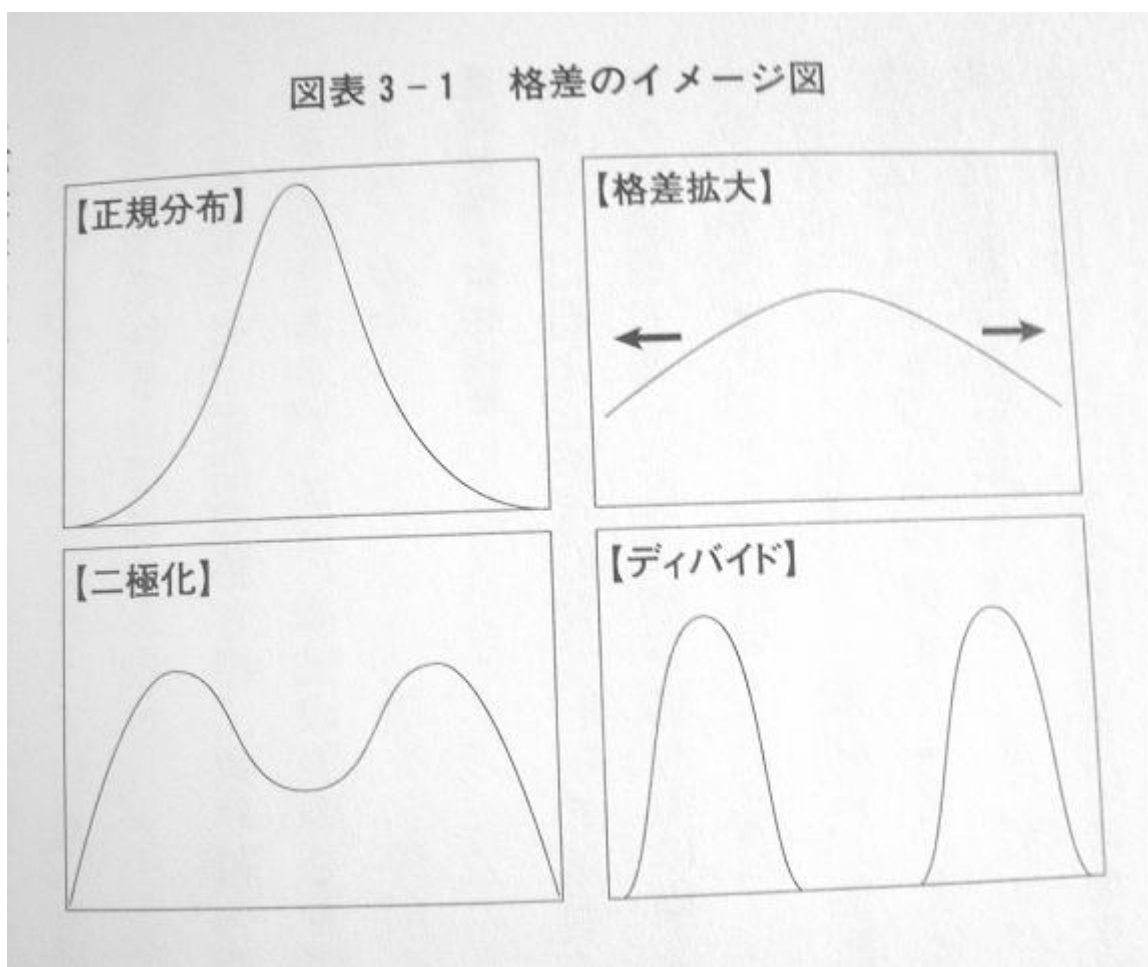
(「労働ビッグバン」 106)



「希望格差社会」において山田昌弘はこのような産業形態の例として、中核において設計や専門的業務を行う少数の正社員と、単純労働を行う派遣社員群という光景が見られる調査会社やIT企業を挙げている。

#### 6.4 「福音」は二極化した

このように、現在の日本はグローバル化、ネオリベリズムという主義によって高度成長期などと比べて極端な二極化されていると言えるが、「希望格差社会」において山田は二極化と比べての「ディバイド（分断）」（「希望格差社会」51）という言葉のイメージを強調している。



ディバイドは分断という意味であり、人々が上下に分けられ、上下間に溝ができ、そ

の溝が容易には乗り越えられないというイメージで使われる。

(「希望格差社会」) 51

個々人の経済の成長期待においてその性質が「希望あり」「希望なし」という白黒に分かれてしまった事が社会の基調となりつつあるのだ。世論調査で「去年と比べた生活の向上感」が近年急激に悪化している事がこれを裏付けている。

一方でこのような基調にありながら「生活の程度」の調査で「中の中」という「希望」が今も維持されているが、これは将来への希望的観測でなく「分断」という深い溝をどうにか乗り越えたいという「祈り」であろう。

日本における「資本主義の精神」は「努力」である。だから「福音」を求める「祈り」を行動で表現するとき、経済的上昇を志向する「ガンバリズム」に立ち返り、さらに強化し「福音」が訪れる期待感を再び実感しようとする事は原理主義的「ガンバリズム」と言える。「自己責任」を基調としてネオリベラリズムへ志向する「中の上」志向とは原理主義的「ガンバリズム」であると言える。

「分断」という「終末説」は確かに絶望であるが、同時に危険な魅力に満ちて「信徒」を駆り立てる。ここで小原克博からの引用を再掲する。

「終わりなき日常」からの脱出へと駆り立てる終末論的な力は、現代社会の内部で醸成されている。教師や親といった現代の預言者（あるいは偽預言者か）によって示された人生成功の道から、時折、無性に脱線したくなるのにもそれなりの理由がある。  
(「現代世界を生きる『私』—自己を映し出す鏡としての原理主義」、『Azest』(増進会出版社) 2002年5月号

<http://www.kohara.ac/essays/azest200205.pdf> 2009 1 25)

新しい「現代の預言者」としてネオリベラリズムが日本人の心理に台頭しつつあるのではないか。そして「中の上」に志向とは日本における「資本主義精神」の倫理における、旧来の「一億総中流」「ガンバリズム」から分派した原理主義的「ガンバリズム」と理解できるのではなかろうか。

## 6.5 「福音」を求めて孤独に走り続ける

日本において「ニート」という言説が定義を逸脱する背景には宗教的心情があるのである。そして「ニート」という言葉は「不信仰」を表現するのである。だからネオリベリズムに殉ずる急先鋒の「原理的ガンバリズム」派は「自己責任」を正義として「努力して社会的に有用になろうとしない」ので「ニート」を罰しようとする。また「ニート」が「ニート」を自称する時は「努力して有用になれそうもない」自分を罰するのである。この行為はある種の「信仰」告白と言える。希望の有無、将来への（特に経済的な見通し）などにより、「信仰」への態度は二極化して相反するように見える。しかし、両者とも「ニート」という不安定について関わる時、倫理的価値基準を強く念頭に置いているのだ。それがどこまで自覚的なものかは個々人でかなりの差異があるだろう。

日本人は近代資本主義を発展させる過程で「資本主義の精神」の大气で走り続けるための「肺機能」を強化したのだともイメージ出来る。私たちは精一杯の空気を吸い込む事が出来る。しかし、呼吸行為自体が過呼吸を引き起こす事があるし、生存に必要な酸素もかつての生物にとって猛毒であったのだ。

日本における古典的「一億総中流ガンバリズム」の立場からは、現在直面する不安定の性質の違い、「努力」と「倫理」の区別が不明瞭なのである。だから「ニート」という言説は今日も日本を複雑に流行するのではないだろうか。

文字数 27000 字

一頁あたりの字数 (40 字×30 行)

総ページ数 (本文) 40 ページ

400 字詰め原稿用紙に換算した場合 67 ページ

#### 参考文献

「生きさせろ！ 難民化する若者たち」 雨宮処凛 2007 太田出版

「悪夢のサイクル ネオリベリズム循環」 内橋克人 2006 文藝春秋

「社会学小辞典 新版」 浜嶋 朗,石川 晃弘,竹内 郁郎 編集 2001 有斐閣

「労働ビッグバン これ以上、使い捨てにされていいのか」 牧野富夫 編著  
生熊茂実,今村幸次郎,藤田宏 著 2007 新日本出版社

「あの哲学者にでも聞いてみるか」 鷲田小彌太 2007 祥伝社

「希望格差社会」 山田昌弘 2004 筑摩書房

「格差社会スパイラル」 山田昌弘 伊藤守 2007 大和書房

「不安定を生きる若者たち」 乾彰夫編著 他 2006 大月出版

「良い仕事」の思想 杉田芳美 1997 中公新書

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

マックス・ヴェーバー著 大塚久雄訳 1989 岩波文庫

(財団法人 社会経済生産性本部,2007,『ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書』：62)

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>

年間総労働時間の国際比較（製造業生産労働者、2003年）

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/05/s0520-7c.htm>

トヨタ自動車：企業情報 > ビジョン／フィロソフィー

([http://www.toyota.co.jp/jp/vision/production\\_system/origin.html](http://www.toyota.co.jp/jp/vision/production_system/origin.html))

内閣府大臣官房政府広報室 「国民生活に関する世論調査」平成15年

<http://www8.cao.go.jp/survey/h11/kokumin/2-1.html>

こころのサポートシステム（メンタルヘルス対策事業）

「H20年6月発表 警察庁統計資料」

<http://www.t-pec.co.jp/mental/2002-08-4.htm>

「現代世界を生きる『私』—自己を映し出す鏡としての原理主義」、『Azest』（増進会出版社）2002年5月号 2009 1 25)

<http://www.kohara.ac/essays/azest200205.pdf>

図録▽主要国の自殺率長期推移（1901～）

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2774.html>